

Title	Relation between climacteric symptoms and ovarian hypofunction in middle-aged and older Japanese women.
Sub Title	本邦中高年婦人の不定愁訴の実態と卵巣機能低下との関連についての検討
Author	春日, 美智子
Publisher	慶應医学会
Publication year	2005
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.82, No.2 (2005. 6) ,p.28-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	号外
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20050602-0028

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Relation between climacteric symptoms and ovarian hypofunction in middle-aged and older Japanese women.

(本邦中高年婦人の不定愁訴の実態と卵巣機能低下との関連についての検討)

春日 美智子

内容の要旨

(緒言) 更年期障害とは、欧米では卵巣機能低下により出現する諸症状を主体として認識されているが、本邦では「更年期に現れる多種多様の症候群で、器質的変化に相応しない自律神経失調症を中心とした不定愁訴を主訴とする症候群」と定義されている。このように更年期障害の概念は地域によって違いが存在し、統一した診断基準が存在しないのが現状であるが、本邦のみならず世界的にも更年期婦人に出現する諸症状の実態についてほとんど検討されていない。本研究では本邦中高年婦人にみられる不定愁訴の実態とその特徴について解明する目的で、慶應義塾大学病院産婦人科外来に併設されている更年期専門外来受診者を対象に調査を行い、各不定愁訴の詳細と自然閉経を中心とした卵巣機能低下との関連性について検討した。

(対象と方法) 1993年から1998年の6年間における慶應義塾大学病院産婦人科更年期専門外来受診者のうち40歳以上60歳未満の1069例 [50.2±4.7歳 (平均年齢±標準偏差)] を対象とした。更年期不定愁訴の客観的評価法であるKuppermanの更年期指数を基に作成された慶應式調査票を用いて記入方式のアンケート調査を行った。回収された調査表から各症状における有症率と重症率を算出して評価した。卵巣機能は血清卵泡刺激ホルモンおよびエストラジオール濃度を測定し評価した。さらに対象を閉経前期、閉経周期、閉経早期、閉経後期の4群に分類し比較検討した。

(結果) 解析の結果、以下の事実を明らかにした。有症率は高値の順に「疲れやすい」、「肩こり」、「もの忘れ」、「神経質」、「発汗」であり、重症率は高値の順に「肩こり」、「疲れやすい」、「発汗」、「手足の冷え」、「神経質」であった。これらの症状と比較して「ほてり」、「イライラ」、「不眠」は有症率および重症率のいずれも高値を示さなかった。女性ホルモン低下に起因する「ほてり」、「不眠」は、閉経前に比し閉経周囲や閉経後の有症率が有意に高値であった。「腔乾燥感」は閉経前に比し閉経後の有症率が有意に高値であった。「ほてり」、「腔乾燥感」における有症率は、いずれも卵巣機能低下群の方が卵巣機能群より有意に高値であった。

(結論) 本邦中高年婦人において「ほてり」、「発汗」、「不眠」の各症状は、欧米と異なり最頻度に出現する症状ではないことを明らかにした。また、「ほてり」、「腔乾燥感」は女性ホルモン低下に密接に関連した症状であることを実証した。

本研究により、日本人女性における更年期不定愁訴の実態の一部が解明され、日本と欧米との間に更年期における症状出現傾向に差異が存在する可能性が示唆された。

論文審査の要旨

更年期障害の概念は、日本と欧米で異なるため統一した診断基準が存在せず、また世界的にも更年期女性に出現する症状の実態について詳細には検討されていない。本研究では、更年期障害の実態を明らかにする目的で、慶應義塾大学病院産婦人科更年期外来受診者を対象として、慶應式調査票を用いて不定愁訴の実態 (有症率と重症率) およびその症状群の自然閉経による卵巣機能低下との関連を検討した。

審査では、まず慶應式調査票の20症状40項目が、細分化されすぎており、患者の協力を得にくいのではないかと指摘がなされたが、更年期女性不定愁訴を幅広く検討するためには40項目が必要と考え、未記入部分などについては問診で補っているとの回答がなされた。次に検討課題として、これらの諸症状を原因別に性ホルモン低下による症状、自律神経失調由来の症状、うつ傾向などの精神神経症状などに分けて検討すべきではないかと指摘がなされた。その際、自律神経失調に対する検査法として血圧や脈圧の変動測定などは簡便でありかつ客観的な評価につながるものであろうとの助言がなされた。また自律神経症状の比較対象として中高年男性の検討も行うべきとも提案された。それに対して、今後このような客観的な評価も加えての調査研究を考えるべきであると回答がなされた。また本研究では、更年期外来受診者が対象であったことから、「疲れやすい」などの有症率が高かったのは当然の帰結とも考えられ、問題にすべきは有症率よりは重症率ではないかと指摘がなされた。そして対象者に各種病前性格テストを施行することにより、更年期外来受診者の性格傾向が明確になるのではないかと提案がなされた。これに対してこれまでも当外来では、自己抑うつ評定法 (SDS) を用いて、抑うつ傾向の評価は施行しており、半数以上の患者が抑うつ傾向を示しているが、その中で精神科受診の必要性を認めた症例については、当外来より依頼しているとの回答がなされた。さらに更年期障害の各症状に対するホルモン補充療法の有効性に関する質問がなされた。これに対して、ホルモン補充療法を施行することにより比較的早期に改善する症状は、「ほてり」「発汗」などの血管運動神経障害様症状や睡眠障害であり、緩徐に改善する症状として、「手足のしびれ」などの知覚障害様症状があげられると回答がなされた。反対にホルモンが無効な症状は、「疲れやすい」「心悸亢進」であるとの回答もなされた。最後に更年期症状の発現には、血清エストロゲンレベルのみならず、エストロゲン受容体の遺伝子多型、HLAタイプあるいはABO式などの血液型を介しての遺伝との関連も存在するのではないかと指摘があり、今後検討すべき課題とされた。

以上のように、本研究はなお検討すべき課題はいくつかあるものの、本邦中高年婦人の不定愁訴の実態の一部を明らかにし、卵巣機能低下と関連する症状と関連が薄い症状とを明確にした点で有意義な研究であると評価された。

論文審査担当者 主査 産婦人科学 吉村 泰典
精神神経科学 鹿島 晴雄 内科学 猿田 享男
内科学 鈴木 則宏
学術確認担当者: 北島 政樹、鹿島 晴雄
審査委員長: 鹿島 晴雄
研究指導者: 野澤 志朗 (産婦人科学)

試問日: 平成17年 2月22日